



独立行政法人 国立病院機構

四国子どもととなの 医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—

高松市立美術館から届いたハンカチとマグネットのギフト



善通寺第一高校 デザイン科の学生さんよりいただいた「指人形制作キット」いろんなパーツを組み合わせるとオリジナルの指人形が完成します。(後ろで作業しているのは井上 猛先生です)

2014年 10月号

—院内の小さな声から—

当院には、病棟で患者さんの選択食の聞きとりや医療行為以外の身近なお世話を担当している病棟コンシェルジュさんがいます。ボランティアさんが作った小さなギフトを患者さんたちに届けたり、病棟でのお茶会や演奏会を企画したり、アート部門とも提携しながら、患者さんの入院生活が少しでも快適なものになるよう、心を込めて日々努力しています。

先日、あるコンシェルジュさんが、四国新聞の切り抜きを持って来てくれました。読者からの手紙に書かれていたのは、当院で研修中だった看護学生さんへの感謝の言葉でした。患者さんは手術入院中、看護学生さんとの何気ない日常の会話に励まされて、楽しい入院生活をおくることができたそうです。どうしてもお礼が言いたくて投稿した。と書かれていました。人と人との間に流れる「何か」は、その密度を計算することも温度を測る事もできません。でも、そこには確かに「何か」があります。研修中の看護師さんが届けたそんな「何か」が、患者さんに伝わって患者さんが手紙を書かれたこと。その記事を読んで感銘を受けたコンシェルジュさんが私に知らせてくれたこと。「何か」はこんなふうに循環します。だから、病院という場所で交わされるその「何か」をできるだけあたたかで優しいものにすること。日々、こころがけてゆきたいと思いました。

高松市立美術館・善通寺第一高校からのギフト

高松市立美術館の学芸員さんは香川小児病院時代から、絵画収集のための協力や、当院のホスピタルアートの紹介など、専門家の視点から、様々なかたちでサポートをしてくださっています。「これからの病院と美術館の関係性や、在り方」について考えてゆく中で、刺激を与え合い、共に育ってゆける大切な仲間です。先日、手作りのハンカチと動物のマグネットをニッチの中に入れるギフトとして届けてくれました。これは美術館で開催された夏のイベント時に制作されたものです。患者さんの回復を願う手書きのメッセージカードが添えられています。

善通寺第一高校デザイン科の学生さんからは、指人形のキットが届きました。顔のパーツ。髪の毛のパーツ。洋服や帽子や天使の羽まで。沢山のパーツを組み合わせると出来上がる指人形は、作った人の分身のように一体一体が全く違った表情に仕上がってゆきます。このキットは5階のそらいる病棟のコンシェルジュさんによって病棟に届けられ、そこで入院している子どもたちと一緒に制作され、完成した指人形は、ニッチを通じて扉を開いた方々へと届けられました。香川小児病院での最初の壁画制作時から協力してくださっているデザイン科の井上 猛先生は、「デザインは相手を思いやる気持ちから生まれる」と話されます。入院中にこの活動に出会い、退院してからも定期的にニッチにギフトを届けてくれるAちゃんはメッセージカードに「見つけてくれてありがとう。」と書きます。Aちゃんにとって誰かが自分の作ったものを持って帰ってくれることが、何より嬉しいのだそうです。「プレゼントがなくなるという事は、誰かが喜んでくれた瞬間があったということで、それは私にとってのプレゼントのようなものです。」と話してくれました。今日も病院の片隅で誰かが誰かを想って作った小さな作品が、誰かの心をあたためています。小さな声だからこそ、そのままのかたちでちゃんと心に届く事もあります。



今月の一枚

作家: 浜崎 恵利 はなをくばるとり

優しい気持ちになるような春めいた色彩にしました。「花」には幸せや喜びと言った意味を込めました。患者さんにそっと寄り添い、幸せを与える作品になるようにと思い制作しました。